

第 81 回歴史探訪の会「いましろ大王の杜」を訪ねて

実施日：令和4年5月18日(水)

場 所：大阪府・高槻市

案 内：内海春樹 (2579)

梅雨の先駆けのような天候が続いたが、久しぶりの晴天の下 JR 摂津富田駅に女性5名を含め22名が集合。朝礼でコロナや暑さ対応の確認をして出発。駅から目的地の今城塚古墳までは、パナソニックの工場に沿って約2キロを歩く。



「いましろ大王の杜」は大阪府高槻市にある今城塚古墳と古代歴史館の総称です。

この地は古くから“摂津の国”と呼ばれ淀川、木津川を通じて大阪湾や大和にも通じる交通の要衝でした。

このあたりには、古墳が700ヶ所以上あり、単に地方の豪族だけでなく、中央政権との関係の深かった有力者が沢山いたと考えられます。(藤原鎌足の墓もこの地域にあります)



今城塚古墳に到着後、木陰に座り「古墳」についての勉強会

近年“今城塚古墳”が歴史家から注目をあびているのは、宮内庁が第26代継体天皇陵を“太田茶臼山古墳”としていたのが、“今城塚古墳”の調査の結果、本当はここだという事がわかりました。宮内庁の指定を受けてない事が幸いして自由に立ち入れ、発掘調査が出来た結果ということです。歴史家からは「天皇陵をあばいた」と言われるが、それでも宮内庁はいまだに認めません。

この古墳の墳丘の長さは190M、外濠を含めた長さは350Mと巨大なものです。前方墳の角から見ると、前方後円墳の形がとてもきれいに見えました。



古墳について内海さんからの説明



前方墳の角が綺麗に残っています

発掘調査は1997年(平成9年)から毎年、高槻市立埋蔵文化財調査センターが行っています。前方後円墳の構造・石棺・濠の他多くの埴輪が明らかになりました。特に内側の堤で埴輪祭祀(はにわさいし)区が出土し、そこから色々な人物・家・鳥・馬・など13種類、113点の埴輪が見つかり、これは日本最大のものです。なかでも家形埴輪は、高さが170cmもあり入母屋(いりもや)造りで、神社建築の屋根を飾る鯉木(かつおぎ)、千木(ちぎ)があり、高床の柱を円柱で表現している。吹き抜けの構造で神社と考えられます。

石棺は3つあり、その石材は“奈良二上山”、兵庫県”、”熊本県(アソピンク)”と異なるものが使われている。(継体天皇が息子の・安閑天皇・宣化天皇の分として用意したものか)

1500年も前に九州や兵庫県からこのような巨大な石を運んだことに驚かされました。



堤を進むと、埴輪祭祀区があり、そこには 113 点の復元埴輪がおかれている。これは、天皇が生存していた時の権威の様子と、黄泉の世界へ旅立つ様子を表しています。



これらの埴輪の製作は、1.5キロ離れた丘陵地帯で約3万㎡に広がる日本最古で最大の工場でした。

(新池遺跡 西暦450年～550年)

埴輪造り工程 素地作り(粘土・砂・水)～埴輪の形づくり～乾燥～焼く～設置。現在は窯や工房などを復元した「ハニワ工場公園」となっています。



復元されたのぼり窯を見ると、現在の丹波や信楽で見る窯と変わらず、1500年前の人の技術に驚かされます。

いよいよ天皇の御陵の中へ入って行きます。

こんな経験は初めてで「ちむどんどん」

伏見大地震で崩れた後円部に登ると石棺が

収められた上部に立つことができます。

(戦前であれば不敬罪にあたるのでは?)

ここで埋葬された第26代天皇・継体天皇に

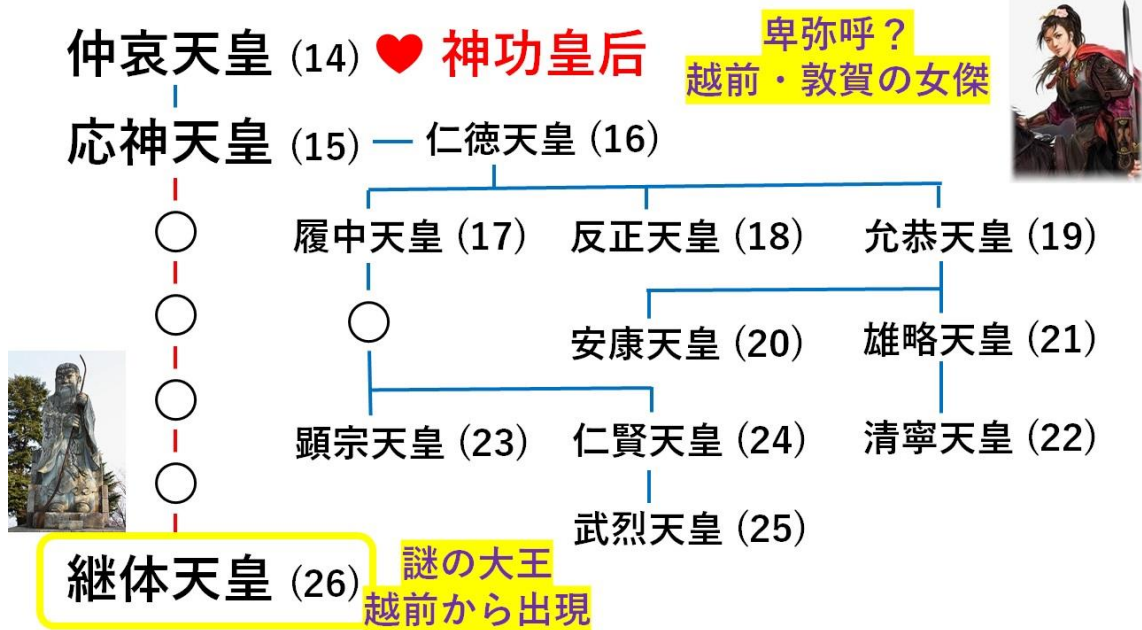
ついて学習する。

この天皇は地方出身の人間として初めて天皇へ即位した異例の経歴の持ち主である。



その生涯には、様々な説が飛び交い、謎が多い人物として語られてきた。

Q.地方出身の天皇がなぜ誕生したのか？



A .仁徳天皇から続いてきた直系の皇子が不在となったため。

第 15 代・応神天皇(大王)。その応神の息子仁徳天皇から武烈天皇まで 10 代続いたが、25 代・武烈天皇には子がなかった。つまりは仁徳天皇から続いてきた直系の皇子が不在になったというのだ。男系男子を探した結果、越前(福井県)の傍系から婿を迎え入れるかたちで、新たな王が生まれた。これが継体天皇である。即位した時 58 歳で彼は武烈天皇の姉にあたる手白香皇女を皇后とした。

Q .継体天皇が“謎の大王”と呼ばれるわけとは？

A. 歴代王のなかで、このような地方出身の者が天皇(王)になった例はなかった。

それまではヤマト王権の本拠であった大和か河内(大阪)といった畿内出身の者が天皇になった。継体は当初、自分はその任にないと言って何度も即位を辞退したが、ヤマト王権の中でもっとも力をもつ大伴氏のたび重なる説得を受け、樟葉(大阪府)へ向かい、507年に即位した。このときすでに 58 歳だったというから、よほどの実力者であり、彼でなくては畿内および反乱勢力の平定が成しえなかったと、ヤマト王権の関係者に判断されたとみることができる。

Q .即位後 19 年もなぜ都に入らなかったのか？

A. 継体即位に反対する勢力があったとともに、大和周辺に基盤をつくる時間が必要であった。

樟葉の地は瀬戸内海を結ぶ淀川の中でも特に重要であり、また交通の要衝であったと考えられる。だが継体天皇は、それから19年もの間、ヤマトの地には入らず、筒城(京都府京田辺市)、弟国(京都府長岡京市)へと相次いで遷り、即位から20年目にしようやく大和国に入り、磐余玉穂に都を定めたとされている。入国の翌527年には「磐井の乱」や反対勢力の抵抗は根強かったが、これらを平定し各地に屯倉(みやけ)という政治的な支所を設置、大和政権を確立した。後世の『日本書紀』では天皇家の祖・継体を有徳の君として扱っており、優れた人であったことは事実だろう。

531年 息子に譲位し第27代 安閑天皇、第28代宣化天皇と続き、聖徳太子はひ孫にあたる。更には、現代の天皇家の系譜を素直に遡れば、この継体天皇が祖という事になる。

勉強会を終えて 木陰で三々五々昼食を取り、「今城塚古代歴史館」へ向かう。

ここでは三島古墳群の概要、今城塚古墳の発掘調査で判明した古墳づくりの様々な工夫をジオラマ模型や映像で解説している。実物の埴輪や出土品も見ることができた。



この日の「いましろ大王の杜」には小学生が沢山学習に来ており、この子らと一緒に学べた一日でした。



今城塚古墳を背景にして

写真は上西さん、岸場さんが撮影されたものを使用させて頂きました。